説教ワンポイント

それこそが神の業

ヨハネ六・二四～二九
列王記上一七・一一～一二

「朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい」（ヨハネ六・二七）

ここで、世の中に「朽ちる食べ物」のためと「永遠の命に至る食べ物」のための二種類の働きがあるように思われるかもしれません。でも、本当にそうでしょうか。永遠の命を軽んじるわけではありませんが、普通の食べ物もなければ身体は困ります。汗水流してようやく家族のために今日の食べ物を得ることの誇りを、聖書が知らないはずもありません。

世の中にそのような二種類の働きが別々に存在するのではなく、同じ働きを聖、あるいは朽ちるものとしてしまうのはむしろ、私たち自身なのでしょう。

今朝ラジオでこんな直観体験を話している女性がいました。田舎で育った少女時代、友だちと遊んだ帰り道、一本のあぜ道に先程の夕立でできたと思われる水たまりがあった。飛び越えようと空中にふわっと、上から水面に映った空を見た瞬間、「この水たまり、さっきまで空だったんだ！」。大発見だと思った。さっきまで空にあった水が水たまりになった。周りに草が生えていた。この水が土に浸み込み、やがて草が吸い込むと空が草になる。その草を家で飼うヤギが食べると空がヤギになる。そのヤギの乳を私が飲むとワタシになる。私も空だったんだ！

みんなつながっている。分けて考えるのは人間。仕事も同じ。聖なる仕事とそうでない仕事があるのではない。イエスさまが身を持って示された。手拭いを腰にしゃがみ込み、バケツで弟子の足を洗い始める。それこそが神の業。

（二〇一六年七月一七日礼拝より、津田記す）